

第4回 臨床文藝医学賞 受賞作：S『平原』

『平原』では冒頭からひたすら風景の描写が300ページ以上続く。蟻が雨の日
に落ち葉を頭で持ち上げるのだが、彼が
口で水を吸い取ったり雨宿りしたり、道
草を食ったりする、そうしたものを風景
の一部ととるのか、登場人物の描写とと
るのかで見方は大きく変わるかもしれな
い。彼らが登場人物とならなければ『平
原』には登場人物はいない。『平原』に
は伝えたいものがない。ただ伝わるもの
がある。描くことでこれほど伝わるもの
があるのだ、ということがこれを読むと
わかる。作者のメッセージがあるのかな
いはわからないが、具体的なその風景
の一つ一つから何かが伝わる。

Sはこれ以前にも純文学風の作品やエ
ッセイ、ライトノベル風の作品、官能小
説、断章、手記などジャンルを問わず多
くの書き物を残している。公開されてい
るものだけでも膨大な量になるが、彼か
彼女か知らないが、私が把握しているも
のはSがこれまで書いてきたもののほん
のごく一部でしかないだろう。仮に彼女
としておくが、彼女は携帯の下書きや本
やノートの余白や広告の切れ端などに思
いついたこと、それは小説であったり断
章であったりしたのだろうが、それを書
いた。書いては捨てたり、なくなったり
した。ある時、思い出したことが、自分

が昔書いたことや考えたことなのか、ど
こかで読んだものなのか、全く関係なく
考えついたことなのかはもはや彼女には
わからなくなっている。彼女にとっては、
書くことは残すことではない。忘れるこ
とだったのだろう。しかし忘れるために
書いたはずが忘れたことも忘れてい

『平原』には何もないようでもあり全
てがあるようでもある。彼女はまだ若い
頃に児童文学として、『虹色のきのこ』
という作品を残している。そのシリーズ
の一つに体が小さくなってしまい蟻の世
界に入り込んでしまう、というものがあ
る。彼女は蟻の超個性性にも触れている。
ミクロコスモスとその超個体を若い頃に
描いた物語ではなくどこまでも緻密に描
写することで何か別の現実を描こうとし
たかのようでもある。

蟻が雨の日葉っぱ一枚を口で形をと
とのえて、家を作るという描写だけで50
ページ以上を費やしている。その間に回
想を挟んだり、別の生物の生態が絡んだ
りと直線的には進まない。季節は何度か
経巡る。同じような描写は繰り返される
がまったく同じではない。描写される蟻
も同じ個体ではない。風景と出来事が螺
旋状に描かれていく。私たちはその『平
原』の出来事にその都度立ち合うこと
になる。ふと永遠という言葉がよぎる。
(2024.6.2)

臨床文藝医学賞募集要項

自主制作映画、音楽、写真集、詩集、お蔵入りとなっている修士論文、小説・断章等々、売れることを意図せず人知れず書かれ、制作された作品をドキュメントシブログ上に掲載しております。作者の許可があれば作品も同時に掲載しますが、作品の公開を希望されないものについてはもとの作品を鑑賞していなくてもわかるようにメンバーがレビュー（吟味）します。著作権は著作者に帰属します。エントリー・掲載後に掲載の中止を希望される際にはご一報ください。

年に1回、エントリー作品の中で特に面白いものがあれば臨床文藝医学賞を選出します（特典はございません）。

各年度の募集は1月1日～同年12月31日までとします。賞の選出は翌年度の春～夏頃に予定させていただきます。

売れるかどうかにとらわれず、何かをつくり、考えることの喜びを分かち合える場となればと思います。

分野、ジャンルは問いません。応募は氏名（ニックネーム、匿名希望も可）、題名を添えて下記のアドレスまでお願いします。

rinshoubungeiigakukai@gmail.com